
INFINITE WITCHES **—無限の蒼穹を駆ける白き龍—**

シュウ禅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INFINITE WITCHES | 無限の蒼穹を駆ける白き龍

【Nコード】

N4483X

【作者名】

シュウ禅

【あらすじ】

白騎士事件・・・その日を境に俺たちの世界は一変した。理不尽で歪んだ世界へと・・・
その5年後、歪んだ世界を破壊するかのように突如世界は異形の者たちに襲われた。
その者達の名はネウロイ・・・
この物語は一人の少年と空を駆ける少女達の物語

護りたいから俺は飛ぶ！！

この小説はストライクウィッチーズとインフィニットストラトスのクロスモノでオリジナル主人公が出ます。若干のアンチ要素が含まれます。作者はこれが処女作です。それでもいいという方は是非お読みください

EP・01 扶桑の白き籠（前書き）

ストライクウィッチーズとES インフィニット・ストラトスのク
ロスモノです。

作者はこの作品が初めてですので至らない点などもございますがそ
れでもよろしければお付き合い下さい。

EP・01 扶桑の白き龍

今日も太陽は世界を照らし続ける。

世界が例えどれほど凄惨な出来事が起きていても

平等に

無慈悲に

世界は今

滅亡の危機に瀕していた

「伏せるー!!」

その声が届くのとほぼ同時、爆発音がその声をかき消すように響いた。

「くたばれ!!ネウロイ共!!」

「アハト・アハト8・8 cm砲射撃用意ー 撃てえ!!」

その巨大な砲が火を噴く

次の瞬間目の前にいる黒い異形に砲弾がぶち込まれた。瞬間激しい閃光と轟音がその場にいる兵士達を襲う。

「やったぞ!!」

「敵反撃来ます!!」

「司令部!Dフィールドにネウロイ6! 繰り返す、Dフィールドにー」

「地雷原、突破されました!!」

「くそ、予備陣地へ後退!!」

その指示に従い、後方へと下がる兵士達。

しかしー

「走れ!走れ!!」

「急げ!」

「急ー」

逃げる兵士たちを空から赤き閃光が無慈悲に襲う

「ぎゃあ!!」

「フライング・ボット
飛行壺!!」

「くそオ……」

「多すぎる……」

一人の兵士が呟く……

その眼前には……

無数の黒き異形が人類をあざ笑うかのように立ち塞がっていた。

2039年・・・

その年を境に我々の世界は一変した

その変化を一言で表すとすれば、

我々は人類は互いに殺し合うことを楽しむ余裕を失った、ということだ！
遊戯

ネウロイーーー

突如出現した「異形の敵」

人類はこの黒き異形の者たちと種の存亡をかけた戦いを繰り広げる事になったのである

人類が敵対している敵、ネウロイ。

彼らは『瘴気』をまき散らし、大地を腐敗させる。

その強力な瘴気に人間は太刀打ちできず、死に追いやられる。

しかし、中には瘴気に打ち勝つ者たちがいた。

遙か昔より存在する魔力という力を持つ者

その者達は自らの魔力を機械によって増幅し、普通では持つことのできない兵器を軽々と操り、自在に空を飛び回り、敵の攻撃を障壁で受け止める

人々は尊敬の念を込めて彼女たちをこう呼んだウィッチ魔女と……

欧州―帝政カールスラント東部、ボズナニア

欧州で最も激戦区であるこの地では日々、地獄のような激しい戦闘が繰り広げられていた。

「C中隊！残弾確認！！」

「もうカンバン！！」

「再配分お願いします！！」

「……チっ！！」

C中隊隊長セシリア・グリンダ・マイルズは軽く舌打ちをする。

彼女たちブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊の周りは木々は倒れ、いくつものクレーターができていた

彼女たちの目の前には巨大なネウロイの姿。

その黒き体から伸びた砲塔が彼女達に向けられる。

「……！ 総員、障壁展開！！」

その瞬間、マイルズは部下に指示を飛ばす。

ネウロイの砲から赤い赤い光の奔流がC中隊を襲う

辺りに衝撃が走った

砂塵が舞い、彼女たちを包む。

「被害報告!!」

「全員、生きてます!!」

「よし!全軍、総攻撃!!、敵正面に全弾叩き込め!!」

次々と巨大ネウロイに無数の砲弾が叩き込まれる。

「マイルズ大尉! 徹甲弾残量僅少!!」

「構うな、叩き込め!!」

なおも倒れぬネウロイ

「いい加減墜ちてええええええつ!!!!!!」

そしてついに

KYRAAaaaaa.....

甲高い、ネウロイの叫びがあたりに響くとネウロイはその巨体を光の破片に変えた。

「敵ネウロイ、破壊確認.....」

「ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊よりHQ.....敵大型ネウロイを撃墜、Dフィールド制圧完了しました。」

『こちらHQ、これより代替部隊を送る。部隊到着後、補給に戻れ。それまで現状を維持されたし』

「了解、交信を終了します。」

「.....ふっ」

ほっと息をつくマイルズ。

「大尉、司令部はなんと」

そばに控えていた彼女の副官が声をかける

「代替部隊の到着後、補給。それまで現状を維持せよ、だそうよ」

「そうですか、これで少しは休めますね」

「ええ……中隊円周防衛隊形！各員周辺を警戒せよ！！みんな悪いけどもう少し頑張って！！」

「……了解！！」

指示に従い、円周状に固まる中隊の隊員たち。

しかし、その動きにいつもの精彩さはなかった。

平時であれば、マイルズは緩慢な動きをした部下を怒鳴り散らすところであるが彼女はその気にはなれなかった。

（……みんな相当疲れてる、無理もないわね。）

黒海付近に大規模怪異が発生し、欧州に侵攻を開始したのは今から八か月前の2039年4月のことである。

平和に酔っていたオスマルクを瞬く間に占領し、大国カールスラ

ントに電撃的侵攻を開始したのである。

欧州各国をはじめ、世界は震撼した。

現在、カールスラント・オストマルク国境では絶望的な防衛線が繰り広げられている。

ネウロイの侵攻は激しく、このままではカールスラントも席捲せっけんされてしまうのは時間の問題と思われていた。

世界各国から援軍が送られてはいるが、強大なネウロイを食い止めるには至っていない。

彼女たち、ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊もその送り込まれた援軍の一つであった。

（派遣されてからというものの、あちこちに狩りだされてるくに休みを取ることもできなかつたわね）

彼女たちはネウロイのカールスラント侵攻初期から参戦し、今現在もこうして前線に立ちつづけ、欧州防衛の一端を担っている。

それ故に連戦に次ぐ連戦により部隊の疲労も蓄積されていた。

（けどこの作戦さえ終われば後方で久しぶりに休暇がもらえる。・・・お休みももらったら何しようかしら？）

彼女たちが周辺を制圧したことでほぼ八割がた今回の侵攻作戦は成功したといえる。

他の戦域も時期に制圧されるだろう。

この作戦の成功の暁にはカールスラントの首都、ベルリンで役3か月ぶりの休暇を取れることとなっている。

隊のみんなでベルリンを観光するのもいいかもしれない……

そんなふうはこのあと休暇のことを考えていると

「ま、マイルズ大尉！ う、上を見てください！！！」

部下の一人から突然悲鳴のような声で報告が入る

「どうした！？」

上を見上げてみると……

「そんな……」

空にひととき巨大な存在が彼女達の前に現れる

巨大な白鯨を思わせるシルエットの巨大なネウロイが小さな僕をつれそこに君臨していた

巨大爆撃型ネウロイ・ディオミディア

最近現れるようになった敵の新型だ

突如として現れた強敵に隊員たちの顔が絶望に染まる

彼女たちは装甲歩兵だ。陸上の敵は何とかできても空にいる敵はど
うにもできない。

ディオミディアがその身につけている機銃を彼女たちに向ける。

もう駄目だ………

そう思ったとき、

どこからか砲弾が飛来し、ディオミディアに直撃する。

『こちら代替部隊だ、遅くなって済まない』

無線機から代替部隊の隊長と思わしきの太い男性の声が聞こえる

「あ、ありがとうございます!!」

『これより敵の注意をひきつける!!君たちはその間に撤退を!!』

「で、でもそれじゃあ!!」

魔女ウィッチでもない者が敵の攻撃を食らえば一溜まりもない。

彼らは文字道理死にいくようなものだ

『魔女君たちは我々の希望なんだ！！こんなところで命を無駄にするな
！！』

そう叫ぶ代替部隊の隊長

「……すぐ戻ってきます、だから絶対に死なないでください！
」

マイルズはそう答えるのが精いっぱいだった

『気にするな、いい女を待つのは男の甲斐性さ。さあ、行けえ！！』

「はい！！全軍後退！！」

そう叫び後退しようとするマイルズ

しかし……

ディオミディアから一条の閃光が走り、代替部隊を襲った。

その攻撃で代替部隊の戦車のほぼ半数が壊滅。

「そ、そんな！！」

さらにマイルズたちを逃すまいと無慈悲にその砲塔を彼女たちに向け、放つ。

「くう、・・・・・・・・!!」

何とか障壁で防ぐが押されるマイルズ。

「もう、駄目・・・・・・・・」

今度こそ終わりだ・・・・・・・・そう思った瞬間

一条の雷光がネウロイを貫く

瞬間、激しい轟音と共にネウロイは光の欠片となって消えた。

「・・・・・・・・え？」

一体何が起きたのだろうか。

あまりに唐突な出来事に呆然としてしていると突如インカムに若い男の声が入ってくる。

「大丈夫か、その陸戦ウィッチ！」

声のする方を見上げると、そこには一人の少年がこちらに降りてきた。

年齢は15、6といったところか、背は170cm半ば、扶桑人特有の艶やかな黒髪がところどころはねており、髪だけを見れば年相応かそれよりも下に見える。しかしそれなりに容姿が整っているのに加え、強い意志が宿る蒼く澄んだ瞳が大人びた雰囲気を出していた

「こちら、義勇^{ぎゆう}統合^{とうごう}戦闘^{せんとう}飛行^{ひこう}隊^{たい}隊長^{ちやうじやう}、緋村^{ひむら}優^{ゆう}刀^{とう}大尉^{だいうじ}だ！そっちの指揮官^{しきわん}は誰^{たれ}だ？」

「は、はい！！ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊セシリア・グリンダ・マイルズ大尉です。助けていただきありがとうございます」

「いや、こちらこそ遅れてすまない。今全線域がしっちゃかめっちゃかでデカブツを発見するのが遅れた。マイルズ大尉は今のうちに戦車部隊の怪我人の救出、手当てを頼む」

そういつて優刀は肩にかけていたリュックサックを下ろす。

「メデイカルキットまで・・・いったいどこから？」

「何、近場に補給所があったからな、来るついでにもしかしたら、

と思つてもつて来たんだ。あと……マルセイユ!!」

そう上空に向かって叫ぶと上空を警戒していたウィッチが一人おりてきた。

その手には武装コンテナがぶら下がっていた。

「あと弾薬もついでにおいていく」

「いたりつくせりね。」

『優刀!!』

突然無線に少女の音が響く。

「武子、どうした?」

『三時方向から敵第三波!!すぐ戻ってきて!!』

「了解、今戻る!!」

「新手?」

「ああ、あとは俺たちが相手する。航空型だけみたいだからな、今のうちに怪我人をつれて後方へ下がってくれ」

「後武運を!!」

優刀は敬礼をして空へと去っていく

「あの噂は本当だったのね。」

「はい。最初はびっくりしましたが、男のウィッチメールウィッチ、一Waib Drache《白き龍》は実在したんですね。」

魔法を使えるのは圧倒的に女子が多い、

しかし、極稀に魔法力を生まれながらに持つ男子が現れる

今日の前に現れた少年もその一人である。

しかし、彼が有名なのは魔法が使える男子だからではない。

「オストマルク撤退戦において、迫りくるネウロイの軍勢を抑え込んだ扶桑の英雄……」

オストマルクの都市、クラカウより民衆がカールスラントに避難する折、ネウロイが大規模侵攻をしてきたことがあった。あわやカールスラントにまで侵攻されるところまできた。その時、部隊を率いて難民防衛に当たったのが緋村優刀率いる扶桑国軍遣欧艦隊義勇飛行中隊であった。

その時に多くの難民を救ったこと功績からカールスラントの人々から畏怖と尊敬の念を込めてこう呼ばれるようになった

一Waib Drache《白き龍》と……

「下原、敵の数は？」

「はい、距離110000、高度15000、数は小型種12、中

型種3です。」

下原定子少尉の報告が入る。

「なんだ、いつもの雑魚どもか。」

下原の報告を聞いたドミニカ・S・ジエンタイルがめんどくさそうにつぶやく

「ちよつと大将、不謹慎よ。」

その不謹慎な発言にエディータ・ロスマンが頭を抱えながら苦言を呈す。

「まあエディータ、大将の言うことももつともだ。ここ最近は特に張り合いがないのが多くてつまらん。」

「ラルまで……」

「ところで優刀、彼女たちはどうだった？」

いつの間にか横についていたヴァルトルートクルプンスキーが意地の悪い笑みを浮かべて聞いてきた

「ああ、伯爵の予想通り、可愛い子ぞろいだったよ。」

「それはよかった！ 優刀あとで一緒に彼女たち食事に誘いに行こうよ！」

「……伯爵、お願いだからやめて」

クルプンスキーの彼女らしいいつもの調子にこの部隊の副隊長、加藤武子が頭を抱える

「さてと、おしゃべりは終わりだ………加藤隊はロスマン隊と共に小型機の牽制を、残りのモノは俺と共に中型をつぶすぞ！
……化け物どもに我々の恐ろしさを思い知らせてやれ！！」

「了解！！」

年若い少女たちの凜とした声が蒼き戦場に響き渡る。

優刀の合図とともに少女たちはいっせいに行動を開始する。

「定子ちゃんついてきて！、エディータ、フォローよろしく！」

「了解！！」

真っ先に行動を開始したのは加藤。

僚機である下原に声をかけ敵にめがけて一気に急降下する。

加藤と下原は持っていた機銃を小型の一群に掃射する。

敵は突如頭上から降り注いできた銃弾になす術もなくその身を撃ち抜かれる

エディータとその僚機であるエーリカ・ハルトマンがタイミングを見計らい、続いて降下する

加藤と下原を追いかけていた敵が更に上空からくる二人に気づくが時すでに遅く、反撃しようとして試みるもそれよりも早くエディータとハルトマンが銃弾を叩き込む。

予期せぬ第二波に敵は対処するまもなく次々落ちていく。

当初確認された敵はその数を12から8に落とした。

加藤たちが小型をひきつけてできた隙間を6つの影が一気に駆け抜ける。

駆け抜けた後には数はさらに減り、5

「ジェンタイル隊は右の、ラル隊は左を頼む！」

「了解」

「ああ、任せろ」

6つの影が一気に加速する。

接近に気付いた敵が表面につく機銃を掃射するが6つの影は華麗にすり抜ける。

ジエンタイルの後ろについていたフェデリカ・N・ドツリオが前に躍り出てその身に持つ大型の機関砲を構え、中型に襲い掛かる。

その強力な火力に敵は抗うこともできず、その身を削られる。

すると、ひときわ深く削られた場所から突如赤い宝石のような物体が姿を現す。

「大将、お願い!!」

「任せろ」

ジエンタイルはさらに加速、

その赤い宝石めがけて矢のように飛んでいき、肉薄、

「墮ちろ」

赤い宝石にそのまま拳を勢いよく叩き込む。

拳を叩き込まれた赤い宝石はなすすべなく砕け散る

次の瞬間、

砕け散った宝石に呼応するかのように中型に亀裂が入り、その身を

無数の光る破片に変えた。

「やれやれ、大将も豪快だね。まさか拳でコアを潰しちゃうなんてさ。」

「奴らしいといえば奴らしいけどな。クルプンスキー、そろそろ仕上げるぞ」

「OK、ラル」

そういつて二人は中型にとどめを刺すべく向かっていく。

相対するは彼女たちのゆうに10倍はあるつかという巨大な怪物。

しかしその身は傷だらけであり、今にも崩れ落ちそうである。

GYAaaaaAAAAAa

声にならない咆哮を上げ、

向かってくる彼女たちを落とそうと、機銃を放つが二人は華麗な機動ですべてを躲し、銃弾を放つ。

そしてついに、

「これで、終わりー！」

クルプンスキーが装甲を削り、ついに中型のコアを露出させる。

その隙を逃さずラルがコアを貫く。

「ふ、他愛ないな」

そういつて髪を書き上げるラル。

次の瞬間、

背後で敵が崩れ落ちる体を光の破片に変えた。

G Y a o o o O O O O ! ! !

残る一体になった敵は仲間の敵を取ろうとその攻撃を更に強める。

その銃弾の嵐の間を華麗にすり抜けて敵の身を削る影があった。

「そこだ、食らえー!!」

その間をすり抜け機銃を次々と潰していく少女、ハンナ・ユステイ
ーナ・マルセイユ。

しかし彼女は先のラルやドリリオのようにその装甲を削るようなこ
とはしない。

かのじよは機銃だけを狙い破壊している。

そのはるか上空から敵に向かい突撃していく一つの影。

優刀だ

その少年が手に持つのは銃ではなく、一振りの刀。

その姿に気付いたのか、敵は男に向かって機銃を掃射する。

しかし、少年はそのすべてを見切り最小の動きで躲す。

刀を上段に構え勢いを殺さず、敵に降下

「もらったぁああ!!!」

そのまま敵を一刀のもとに両断。

二つに分かれた敵は音を立て、その身を光り輝く破片に変えた。

「ネウロイ、全滅を確認!!」

マイルズは副官から歓喜の報告を聞く。

マイルズはその報告を聞き微笑み一言つぶやく

「Waib Drache《白き龍》が私たちを助けてくれたの
ね・・・」

「義勇統合戦闘飛行隊、任務完了。これより帰還する!」
RTB

2039年

それは、何の前触れもなく人類の前に現れた。

それを我々はネウロイと名付けた。

ネウロイがどこから、何のために来たのか誰にも分からなかったが、彼らによって人々は故郷を、国を追われたのは確かだった。

しかし、彼らに対抗する者たちが現れた。

人々は彼女たちをこう呼んだ

ウィッチ
魔女と・・・

これはウィッチ達と共に空を駆ける一人の少年の物語・・・・・・・・

EP・01 扶桑の白き龍（後書き）

どうも初めまして、シュウ禅です。

以前からやりたかったストライクウィッチーズ（以下SW）とインフィニット・ストラトス（以下IS）のクロスものがやっとできました。

すいません・・・とか言いながらこのEP・01

ISのイの字も出てきません

ISファンの皆様ごめんなさい。

今回はプロログなのでオリ主やその周りのウィッチという存在の説明を優先した結果ISを入れる余地がありませんでした。

たぶん、篝やら、セシリア、IS学園の子達の登場はもう少し先になります。

4、5話はたぶん優刀達、義勇統合戦闘飛行隊の周りの世界観と情勢の説明の回になると思います。

あ・・・でも、あの子はみんなに先行して出るかな？

さて、今回出てきたウィッチですがはつきり言います。

ほとんどアニメには出てきていません

アニメに出てきていたのは今回名前だけでできたハルトマンだけです。(あとマルセイユも一話だけでてます)

マルセイユやマイルズは原作者のフミカネ氏の同人誌、「アフリカの魔女」シリーズのキャラです。

他のキャラは島田フミカネ氏のサイトに掲載されている *World Witches* のキャラです。彼女たちがどんなキャラかはそちらのほうを見てください。

あと何人かはちゃんとメディアに出ています。

この作品のモットーは

ウィッチ達を可愛く、かつこよく書く

ISとSWではあまり待遇の良くない男たちにも活躍の場を

という感じですよ。

さて、このあとがきも書き終わりのテンションそのままに書いてしまったのでなんだか長くなってしまいました。

優刀がこの先どのような物語を彼女たちと繰り広げるのか、彼女達のかわいい姿をお届けできるよう頑張りたいと思います。

以上、シュウ禅でした。

EP・02 義勇統合戦闘飛行隊（前書き）

どうも、シユウ禅です。

遅くなりました

と、いうわけで第二話です。

それではどうぞ！

EP-02 義勇統合戦闘飛行隊

俺の名前は緋村優刀。

扶桑国空軍大尉

このカールスラントで義勇統合戦闘飛行隊を率いている世にも珍しい男のウィッチメルウィッチだ。

義勇統合戦闘飛行隊は各国のウィッチを集めて結成された航空ウィッチ部隊だ。

各国の精鋭を集めた部隊とは謳われているが、正確に言えば各国から派遣されたウィッチの寄せ集め部隊というのが本当の所だ。

そんな女子だらけの部隊に男が一人。

他の男連中から見ればおいしいシチュエーションのように見えるのであるが

正直言って彼女たちをまとめ、指揮するのは大変な仕事である事の上ない。

もちろん、彼女たちといるのは楽しいし、かけがえのない仲間だとも思っている。

俺には俺なりの苦労がある、ということだ。

「うん」

午前11時30分

書類を見ながら俺は一人うなり声をあげていた。

「変な唸り声をあげて一体どうした優刀」

そういつて声をかけてきたのはグンドユラ・ラル

カールスラント空軍所属のウィッチで、優秀な航空魔女が所属するJG52の中でも指折りの腕利きだ。

うちの隊の中でも視越し射撃の腕は一、二を争い、年若い隊員からは頼れる姉のように慕われている

「最近ネウロイの装甲が固くなってきただろ、なにか使える武装はないかなと思ってさ」

「なるほどな・・・確かに固かったな、あいつは」

ここ最近のネウロイは急激にその性能を伸ばし始めてきた。

今までは小銃でも十分に貫けた装甲が防弾装甲に変化していたり、再生機能を持っている中型も多くなってきた。

それで何か使えそうな武器があるなら物資の補給の発注と一緒に頼んでみようと思ってカタログを見ていたというわけだ

「いまは何とかなっているが、防弾装甲持ちの小型が出てきたら今のままじゃ手に負えなくなる」

その言葉にラルもうなずく

「だが一番厄介なのは、あの兵器だろうか？」

「ああ、」

そうである。

ネウロイが進化したことで得た厄介な力。

光学兵器である
ビーム

やつらはいまだ人類でも実用できていないビームを使うようになった。

古くからSFの世界で使われている強力な兵器が現実になって我々を襲ってきた

正直言ってこれが怖い。

記録ではビルをまるまる消滅させたとか。

破壊ではない、消滅。

この世界から存在が消えてなくなったのだ。

「今はまだ防げる程度だからいいが、そのうち防げなくなるぞ。」

「今でさえ防ぐと魔法力をこっさり持つてかれるもんな」

今は何とか障壁で防げるからいいがそれもいつまでできるか……

この世界から跡形もなく消えるとか勘弁願いたい。

「どうにかならんもんかね」

そんなふう二人で頭を悩ませていると……

グ~~~~~

何やら奇妙な音が鳴った

「……今のつて」

そう言っつてラルの方を見ると

「違う。私じゃないぞ」

即、否定するラル

その顔はほんのり赤かった

「じゃあ、いったい誰が……あ」

ある部屋の一点を見る

そこはこのオフィスに置かれている応接用のソファアの所であった。ただし応接用とはいっても、今まで本来の目的で使われたことはない。ちゃんとした応接室はほかに用意されている。

大体は隊員が寛いだりするのに使っている以外は今のところ使われていない。

いつもは武子や下原などあたりが気を遣い掃除をこまめに行っつておりそこそこ綺麗なのだが

今日はその真逆

ビールやらワインやらの空き瓶が大量に置いてあった。

昨日、部隊の年長組で飲んでいてそのまま片付けず就寝。

朝片付けようとも思ったのだが、急いで先日の作戦の報告書を作らねばならなかったのでそのまま放置しっぱなしだったのだ

そのゴミ置き場の中心から何かがムクリと起き上がる

「んんんんっ、朝か・・・」

「おはようさん大将」

起き上がってきた相手、ドミニカ・S・ジエンタイルに挨拶する。

彼女の名前はドミニカ・S・ジエンタイル

リベリオン合衆国の精鋭部隊第八航空軍に所属するウィッチだ。

気怠げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意気と情熱の熱血魔女

その思い切りの良さや面倒見の良さからついたあだ名が「大将」

「ああ、おはよう……ところでボス、今何時だ？」

「今11:45だ」

「……もうそんなになるのか。ほかの奴らは？」

「エディータは新人三人の訓練、武子は非番、伯爵は……どこ行っただんだ？」

「さあな。あいつも今日は非番だからな、どっかそこらへんで女の子をナンパしてるんだろう」

「だろうな」

「まあ、伯爵は置いといて……ボス、なんか食べるものないか？」

「冷蔵庫に何かしら入っているだろ？ 適当に自分で作れ」

「……了解」

そういつて隣接される給湯室に入っていく。まあ、給湯室といっても窓際に仕切りを敷いて冷蔵庫とガスコンロをつけただけの簡易的なものだが。基地の給湯室は遠いので仕方がなく簡易的に作った。

そもそも義勇統合戦闘飛行隊が使っているこのオフィス、元々はミールディングルームだったので少々広い。

スペースが余っているのでちょうどよかったのだ。

「じゃあ、私はコーヒーでも入れてくるか」

ラルも席を立ち、給湯室に向かう。

給湯室にはきちんとしたコーヒーミルが置いてある。

コーヒーにこだわりのある武子とラルがわざわざブリタニア製の手動式ミルを取り寄せた。

しかも二つ。

ラル、武子がそれぞれ買い求めたらしい。

一つでいいじゃんと思うのだが、ミルによってはだいぶ味が変わること

まあ実際、二人の淹れたコーヒーはインスタントより格段においしいので文句はないのだが

しばらくするとドミニカは料理を乗っけて戻ってきた。

リベリオン合衆国の国民食、ホットドックである。

「優刀」

「サンキュー」

ラルからコーヒーを受け取り一口

「うまいな」

「そうか」

満足そうに微笑むラル

「ところで二人は何の話をしていたんだ？」

自分の席でホットドックを食べながらドミニカは先ほどの話を聞いてきた

「最近、敵が頑丈になってきただろう？」

「それで何かいい武器はないかって話をしてたんだ」

「なるほどな……」

「リベリオンでなんか使えそうな武器ってないか？」

「そうだな……」

あまり興味なさそうに返すドミニカ。

この態度だけを見ればあまり人の話を聞いていないようにとられるかもしれないが、

そんなことはない。彼女はちゃんと聞いている。

気だるげなのが彼女が一番リラックスできる状態なのだろう。

彼女はきちんと仕事をしているので問題はない。

「どうだったかな、あまり覚えがない。機関砲じゃダメだろ？」

「ああ、どつちかというとり回しのいい機関銃の方がいいかな」

「じゃあ、ないな。今のはどれも一緒だ」

「そうか」

「いつそのこと、ショットガンでも使うか。リベリオンにいいのがある」

「でもそれだと装填数が少なくて長時間戦えないぞ？」

「無駄弾を撃たなきゃいい。至近距離で当てれば問題はない」

「確かにそうだがハイリスクだな」

「やっぱり、機関銃が航空歩兵が持つには一番いいってことか・・・」

「そうなるな、しばらくは戦い方を工夫して、戦っていくしかないな」

事実こうやって自分の意見をきちんと出してくれる。

三人であーでもない、こーでもないと次々に案を出していると

「失礼します、緋村大尉はいらっしゃいますか？」

「ああ下原か、どうかしたのか」

外で訓練をしていた下原定子が執務室に顔を出した。

この時間であれば、いつもなら訓練が終わり次第そのまま食堂に移動しているのに、何か用だろうか。

「はい、整備小隊の土田曹長が時間があればご足労願いたいと。」

どうやら伝言を頼まれたようだ。

「さっさと来いってことか。」

「・・・おやっさん」

土田曹長

統合戦闘飛行隊のストライカーユニットの整備を担当する整備小隊の長。

基本的に整備中隊の切り盛りする最上級下士官というのは現場の叩き上げで登り詰めた人物が多い。

そんな百戦錬磨の人物に俺みたいなひよっこ大尉が逆らえるわけが無い

事実上の出頭命令である

「はあ・・・言ってくるか」

「そうだな」

そういつてラルと執務室を出ようとする

「私も行く」

ドミニカも席を立ちともに行くこととしていた

「いいのか？今日非番だろ？」

「特にやりたいことも決まってるからな、暇つぶしにはちょうどいい」

「そうか、じゃあ下原留守番頼めるか？」

「はい、任せてください」

「じゃあ、言ってくる。」

下原に見送られ、三人は執務室を出て行った

「ご足労いただきありがとうございます」

オフィスを出て格納庫に赴くと格納庫の前で土田曹長が直立不動で待ち構えていた

「あゝ、堅苦しいのは抜きでお願いします」

正直言つて土田曹長に敬語で話されるのはきつい。

何せ扶桑海軍変から自分のユニットを見てもらっているのだ。そんな人物に敬語で話されるのは背中がかゆくなってしょうがない。

「いえ、部下の手前もありますから。」

即答である

確かに曹長より階級が上の大尉がペコペコ頭を下げていたんじゃない。部隊の士気にもかかわる

「………わかった、それで用件つてのはもしかして頼んでいた件か？」

「はい、とりあえずいろいろうちの者たちで試してみたんですが……」

そういつて格納庫の奥へと案内される

案内された先には巨大なモノが鎮座されていた

ーISSだ

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定されて作られたマルチフォーム・スーツである。しかし当初の目的である宇宙進出は一向に進まず、様々な思惑から兵器へと変わり、さらに『スポーツ』へと落ち着いたーーー
ーーー 所謂、飛行パワードスーツだ。

しかし、『スポーツ』へと収まったはずのISSだが、その既存の兵器を凌駕するスペックを持って余しすぎて、スポーツという枠にすら収まらず、軍事力の要となってしまうのである。

そんなスポーツ用品なのか兵器なのかもいまいち定義が定まらないモノがなぜこの格納庫の片隅においてあるのか？

答えは簡単。

うちの部隊にISSを使える人物がいるからだ。

「ドツリオ中尉！大尉が来ましたよ！！」

曹長が叫ぶとISSの後ろから一人の少女が顔を出す。

「Ciao、優刀。報告書は片付いたの？」

そういつて陽気な笑みを向ける彼女の名前はフェデリカ・N・ドッ
リオ

ロマーニヤ公国出身のウィッチでISのロマーニヤ公国代表候補と
いう風変わりな経歴の持ち主である。

国家代表とはISの世界最強を決める世界大会『モンド・グロツソ』
が二年に一度行われる。その大会に出場する選手のことである。

要するに代表候補と言つのは国家代表のIS操縦者のその候補とし
て選出される人達の事である。簡単に言うとエリートだ。

「フェデリカ、どうだ量子変換システムの方は？」

「うーん、とりあえずサンプリングは終わったんだけどね。はい、
これがそのデータ」

目の前にディスプレイが表示される。

「うーん…へえ、思っていたよりも展開のエネルギー消費が少ない
な」

出されたデータの内訳に驚く

「ええ、しかもこれマガジンありよ。」

「すごいな、展開に一秒しかかからないなんて驚きだ」

予想どおりといえば予想どおりの結果に驚く五人。

頼んだ件というのはストライカーユニットにこの量子変換システムを搭載できないかということだった。

三人が見ていたのはISの機能の一つ、量子変換システムの稼働サンプリングデータであった。

試しにカールスラント航空ウィッチの正式装備であるMG - 42を量子変換して展開させてみたのだが、予想以上の良い結果に思わずほおが緩む。

量子変換システムを使うことができれば戦闘に携行できる武装も多く出来るようになる。そしてら継戦能力もずっと長くなって多様な作戦行動もとれるようになる。

正直言って航空ウィッチは積載^{ペイロード}限界が低く、携行できる武装が少ない。最初から装備していた分のマガジンを打ち尽くせばあとはせいぜい予備のマガジンの一つ持てるかどうかだ。

それでは装甲の厚い大型のネウロイが多数出現している欧州の戦いはこれからどんどん苦戦を強いられるのは目に見えている。

フェデリカが使用しているMG - 151のような大型の兵装は強力ではあるが取り回しに難がある。

「量子変換システムに登録できる兵装はこの分だと4つぐらいか？」

今までだとせいぜい一丁か二丁だけである

そついった事情から今回のテストの結果は上々ともいえる。

「ストライカーユニットに搭載できるか？」

「大丈夫だと思うけど、魔力配分をいじらなきゃいけないから今乗っけるエンジンのままじゃ余力がなくてスペックダウンは免れないわね」

「出力不足か・・・」

確かに、搭載することができるとはできるようだがこれでは他の性能が下げなくてはいけない。

持てる兵装が多くなることは重要だが、だからと言ってほかの性能を削るといふ行為はあまりしたくない

「使えると思っただけだね」

「そういえばフェデリカは実戦で使わないな、どうしてだ？」

ふと、ドミニカはフェデリカがISを使わない理由が気になったのかフェデリカに尋ねた。

「ああ、それはね・・・」

グウーーーーーグウーーーーー

突如、格納庫に外から耳を切り裂くようなけたたましいサイレンが鳴り響く。

「敵襲!？」

「まさか、おととい作戦があつたばかりだぞ!？」

「大尉、司令部から連絡がー!!」

下原が電話を持って駆け込んできた。

「はい、緋村」

「ボニンだ」

電話の相手はJG52の飛行隊指令フーベルタ・フォン・ボニン少佐からだつた。

「いったいどうしたんですか？」

「ああ、先ほど全魔女支援要請が入つた」
フロックンアロー

全魔女支援要請が出るなんて多々事じゃない。

「いったいどこから」

「カールスラント・オラーシャ国境沿いを航行する輸送機からだ。どうやら避難民をカールスラントに護送している最中に襲われたらしい。」

「リバウの航空隊が護衛にあたっているんじゃないんですか？」

「どつちやら違つらしい」

オラーシャからカールスラントへの護送任務であるなら航続距離の長い零式艦上戦闘脚を装備している扶桑遣欧艦隊所属のリバウ航空隊が当たっていると思っただんだが・・・

どうやら別の部隊が当たっているらしい。

「今はうちの第二中隊も第三中隊も出払っていて出せる部隊がお前の部隊だけだ。・・・いつてくれるか？」

「了解です、ただちに出击します」

「今、クルピンスキーに指令書を持たせた。詳細は奴に聞け」

「伯爵が・・・？」

意外な名前が出てきたのでふと引っかかる

たしか伯爵は今日は非番だったはず。・・・まさか

「少佐・・・まさか」

「・・・ちょうど奴好みのいい酒が手に入ったんでな、安心しろ、まだ開けていない。奴は素面だよ。後でお前も飲みに来い」

どうやら昼間から飲み比べをしようとしていたらしい。

ヴァルトルート・クルピンスキー

無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽道家。

すらりとした長身と優雅な身のこなしからついたあだ名が「伯爵」
勇猛果敢、敢闘精神に溢れるあまり必要以上にネウロイに接近しユ
ニットを壊す部隊内のクラッシャー。

飄々とした性格で怒られたって気にしない。大概のことは笑って流
す。

朝から姿が見えないと思っていたら指令室にいたのか。

「……………本当でしょうか？」

指令に念を押して確認する。

「当たり前だ。酔っ払いを飛ばせられるか」

「わかりました。信じましょう」

「では頼む」

電話が切れると同時に、伯爵が駆け込んできた。

「優刀、出撃だよ！ 指令から連絡は？」

「今聞いた！」

「はいこれ、指令書。」

そういつて指令書を渡してくる

目的地はここからずいぶん離れている。増槽をつけていくか

「曹長!！」

「了解です、てめえら!！出撃準備だッ!！回せッ!！」

「おおっ!！」

土田曹長が声を挙げ、部下の整備兵に指示を出す。

次々に滑走路にストライカーユニットの発進台が並べられる。

「優刀!！」

滑走路に出ると武子が真っ先についていた

その後ろにエディータ、ハルトマン、マルセイユがこちらに向かって走っているのが見える。

「いったいどうしたの!？」

「スクランブル緊急発進だ!！ネウロイ敵が避難民の乗った輸送機を襲っている。これからオラーシャ方面に向かう。」

「オラーシャの? こっちよりもリバウ航空隊の方が近いような気がするけど……」

「考えるのは後だ先生！大尉、速く出撃しよう！！」

「ああ！！」

マルセイユが自分のユニットに飛び乗りエンジンに火を入れる。他の隊員も出力を上昇させる。

自分もユニットー零戦ーに飛び乗り銃を手に取る

「義勇統合戦闘飛行隊、出るぞっ！！！！」

EP・02 義勇統合戦闘飛行隊（後書き）

どうも、シユウ禅です。

何とか一週間以内に二話目投稿できました。

本当はもう少し前に投稿するつもりだったんですけど、今週なぜかいろいろ忙しくて週末の投稿になりました。

これからは何とか週一で投稿出来たらなあ、と思います。

今回は、ISのあの人たちが登場です。

それではまた。

EP・03 IS インフィニット・ストラトスー（前書き）

三話目です。

一話と二話が長すぎたように感じたので今回は少し短くなっています。

それと今回からやっとIS組が登場します。

それではどうぞー！

「けど、護衛についているのはいったいどの部隊なのかしら？」

目的地に向かう途中、右横を飛んでいた扶桑国空軍、加藤武子が疑問を口にした。

「さあな……通常だったらリバウ航空隊が当たると思うんだが」

扶桑国遣欧艦隊所属リバウ航空隊

リバウ航空隊が装備する零式艦上戦闘脚は長距離航行に優れており、その為オラーシャからの護衛任務であるならばリバウ航空隊所属のウィッチが適任だ。

であるはずがそのリバウ航空隊ではなくほかの部隊が当たっている。

ではオラーシャのウィッチ、または戦闘機部隊が当たっているのだろうか。

先ほど司令部からの新しい情報によるとそちらも違うようだ。

「まあ、行けばわかることだ」

「そういうこと」

左横のラルの意見に同意する

ここであれこれ予想を立ててもしょうがない。

百聞は一見にしかず

現場に行けばわかることである

「そこに助けを求める人がいるならば助けに行く。そしてその力をより多くの人々の為に使う、それが俺たち？ウィッチ？だ」

その言葉にうなづく隊員たち。

例え何があるうとも人々を守るために戦う・・・それが俺たちウィッチだ

「こちら、オラーシャ連邦第583輸送機部隊！ 我、ネウロイの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！繰り返す！！我ネウロイの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！」

オラーシャの乾いた空の下、三機の輸送機が黒き異形から逃げ惑っていた。

「くそ！！来るぞ！！」

一条のビームが一機の輸送機を襲う

「粉くそおおおおっ！！！！」

ハンドルを思いっきり右に逸らし 機体を右に向ける

その機体の船艇下部をビームがカスめる

「き・・・奇跡だ・・・」

『だ、大丈夫ですか！？』

通信から聞こえてきたのは女性の声。

「何とかな！それよりも早くネウロイを落としてくれ！！こっちは避難民が乗っているんだ！！そんな急激な機動は何度もできない！！！」

『は、はい！！』

それを最後に通信が切れた

「くそ！！なんでこんなことになっちまったんだ！！」

「いつもならリバウ航空隊のウィッチ達が護衛についてくれているのになんで今日に限って！！」

いつもであればリバウにいる航空ウィッチの部隊が護衛にあたってくれるはずなのだが今回に限って違う部隊が当たっていた。

彼女たちも何とか頑張ってくれているが、その動きは扶桑の精鋭といわれるリバウ航空隊と比べると格段に見劣りする。

「くそ、このままじゃ・・・!!」

「機長!!」

「どっした!!」

「っ、通信です!!」

「ど、どこからだ!!」

「ウィッチからです!!」

その言葉は喜びに満ちていた

「なんだと!! よし! つなげ!!」

『こちらリバウ航空隊、竹井少尉です!! そちらにあと10分で着きます! だからあともう少しだけ持ち堪えてください!!』

「————お安い御用だフロイライン!! 待っているぞ!!」

そう言って通信を切る機長

「ふ、ふふ・・・副長」

「はい・・・!!」

「あと10分! あと10分で我々の戦友が来てくれる!! それまで
なんとしても生き残るぞ!!」

「はい!!」

絶望の色に染まっていた瞳には今や希望の光が宿っていた。

「はあああっ!!」

掛け声とともに突き出された巨大なランスがネウロイに突き刺さる。

「くらいなさいっ!!」

次の瞬間ランスに内蔵された四連ガトリングガンが火を噴き、ネウロイを内部から破壊した。

「これで三機!!」

息をつく間もなくそのまま次の標的に向かって飛翔する水色の機体。

その水色の機体はいま欧州で多くみられるウィッチの使用するストライカーユニットとは大きく違った

確かに人の形をしているが、手足は一回り大きく、全長は優に3メ

「トールはあろうかという大きさ。」

「そう……ISである。」

「世界最強の兵器とされるISが今、ネウロイと交戦していた。」

「しかし……」

「きゃあー!!」

「いや、こないで!!」

「そのISで構成された部隊はいま、窮地に立たされていた。」

「山田先生!!」

「青い機体を装備していた少女、更識楯無はこの部隊を指揮する人物、山田真耶に声をかける。」

「更識さん!どうかしましたか!!」

「このままでは全滅です!増援はまだ来ないんですか!?」

「は、はい!今通信が入ってあと10分でリバウの航空ウィッチが来てくれるそうです」

「そうですか……」

「増援が来るまであと10分」

楯無のかおが曇る

このままじゃあと10分も立たずに全滅する。

その時

二人の間に一条のビームが走る

「くっ!!」

楯無はガトリングガンを、真耶はアサルトライフルをネウロイに向かって放つ。

二人の攻撃を受けたネウロイはその身をむなっしく光の粒子に変えた。

「先生、このままじゃ!!」

「はい、わかっています!!」

楯無が懸念していることは他の隊員達の事であった。

いや、

正確には彼女たちは軍人ではない

彼女たちはIS操縦者を養成する機関、IS学園に所属する学生である。

ではなぜ学生とされる彼女たちがこの戦場にいるのか。

その理由はISという機体にある。

ISはそもそも、宇宙で活動するための装備として開発されたのだがいつの間にもやら世界最強の兵器として軍事力の要とされた。

今回の大規模怪異発生に伴い欧州の防衛の為に世界中ISも世界中から派遣された。

彼女たちIS学園の生徒もその部隊の内の一つであった。

楯無含め、派遣部隊に選ばれた生徒は皆、各国の代表候補性や、学園でも選りすぐった優秀な人材ばかりだ。

しかし、皆実戦の経験はない。率いている山田先生すら実戦は初めてなのだ。

そのような誰も実戦経験者のいない中での出撃。

敵は派遣以前に渡された資料によると小型のラロスという機種が15機。

機種としては旧式に分類されるのだが、その旧式にすら生徒たちは手こずっている有様であった。

このままではまずい……

楯無はそんな予感がしていた。

そして、その予感不幸にも的中してしまう。

「も、もういやあああああつ！！！！」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！！」

突如、生徒の一人が錯乱し、戦闘空域から逃げようとした。

敵がその隙を逃すわけもなく

「……避けてえつ！！」

ネウロイは容赦なく逃げようとした生徒の背中に機銃を放つ

「きゃああああつ！！」

無残にも背中から撃たれ落下する生徒

「よくもつ！！」

ガトリングガンをラロスを放ち撃ち落とす

「もういや……」

「あたしまだ死にたくない！」

まずい！！

楯無がそう思った時、すでに遅かった。

仲間の一人が落ちたことで最後まで保っていた緊張の糸がぷつぷつ

と切れてしまったのだ。

死ぬかもしれないという恐怖

その恐怖が皆に伝染する

皆戦うことを放棄してしまった。

戦意を喪失したのを感じたのか、ネウロイは戦意を失った生徒の横を通り過ぎ輸送機に攻撃を仕掛けようとする

「みんな!!! しっかりしてください!!!」

真耶が攻撃しようとしたネウロイを撃墜し、彼女たちを立ち直らせようとするが一度恐怖に支配されてしまえばそこからすぐ立ち直るのは困難を極める。

楯無は戦えなくなった仲間をそのままにして一人戦い続ける。

「先生!!! 生徒よりも輸送機を!!!」

「けど、更識さん!!!」

「ISには絶対防御があります!!! たとえ落とされても命には危険はありません! それよりも輸送機を守らないと!!!」

「そ、そんな・・・更識さん」

楯無の無常ともいえる言葉に真耶は困惑の声を挙げる。

「先生！！しつかりしてください！！ あの輸送機には罪のない民間人が乗ってるんですよ！！ 見殺しにするつもりですか！！」

「！！！！」

楯無の言葉でようやく我に返り自らのやるべきことを思い出す真耶。

「更識さん！！私たちが増援が来るまで敵の注意をひきつけます！！」

「はいっ！！」

「他のみなさんはまず自分の身の安全を考えてください！！ まだ戦えるっていう人は私についてきてください！！」

そう言ってネウロイの集団に攻撃を仕掛ける麻耶たち

何人が二人に触発され攻撃に加わる。

そうして麻耶たちはネウロイに攻撃を仕掛け足止めする。

しかしたかが数人では足止めするには限界があり

「しまった！抜かれた！！」

一機が真耶達を抜いて輸送機へと向かう。

「更識さん！！」

「はい！！」

楯無がその後を追いかける。

「このおおおっ!!」

ネウロイに向けてガトリングガンを放つが当たらない。

そしてついにネウロイは輸送機をその射程にとらえた

「だめええええっ!!」

楯無が叫ぶがネウロイは止まらない

ネウロイが輸送機に向けて機銃を放とうとしたその時

ネウロイに向かってはるか上空から銃弾が降り注ぐ。

思わぬところからの攻撃にネウロイは何もできずに光る欠片となり
消滅した。

「え?・・・」

予想外の出来事にあっけにとられる楯無

「わはは、よし命中」 あの距離で全弾命中なんて、私ってば最強ねー!」

「はっはっはっはっ!! 相変わらずいい腕だな! 義子!!」

「何とか間に合ったみたいね・・・」

声が出たかと思うと楯無の頭上を疾風のように駆け抜ける三つの影

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です!! これより貴官らを援護します!!」

EP・03 IS インフィニット・ストラトスー（後書き）

ついに登場しましたIS組！！

やっとです。

しかもしよっぱなから最強の生徒会長、さすが、生徒会長！強い！！

………とはいきませんでした。

扱いが結構不遇になってしまった。……ごめん、楯無さん

いや、IS好きですよ？ ブルーティアーズとか、打ち鉄とか、ラファールとか、かつこいい機体がたくさんありますから！

けど、扱いが不遇とか言ってるけどなんだかんだで楯無さん、ネウロイを旧型の小型とはいえ5機落としてますから普通にエースです。しかも初の実戦で。ちなみに現実でもSWの世界でも合計で5機以上落とすとエースって呼ばれるようになります。

そうやって考えるとドイツのパイロットはすごいですね、撃墜数三桁叩き出しているのはほとんどがドイツのパイロットです。日本にも一人三桁を越すトップエースがいます。

……あまり素直に喜べることではないんでしょうが。

話がそれました。

今回の第3話、ISファンの皆様からはもしかしたらお叱りを受けるかもしれませんが。

この作品のIS、最強って言ってますが、無双のような活躍はしません。機体のレベルを下げたとかそういうつもりは作者の中にはありません。機体は間違いなく時代最高峰の性能を持っています。優刀が作中で言っていたように使える機能が満載です。

それでも今回、生徒が落とされたのは単純に使い手の問題です。

一応、彼女も設定では代表候補生だったんですけどね。話の展開の都合とか、この作品の土台的なものとか考えたら第三話、IS勢があんまり活躍できなかった。

・・・もつと文才がほしいです

話が長くなりました。あとがきなんですけど、いつも短くしようとは思っているんですが、自分の考えを一回整理するための場としても使っているんで、いつの間にか長くなってしまいます。

もしあとがきの長さが気に入らないという方がいたら教えてください。短めに終わるようにしたいと思います。

あと個人的に出してほしいウィッチとかいたら言ってください。頑張って話の中に出したいと思います。

EP・04 魔女とIS Apart (前書き)

すいません、遅れました

というわけで、第4話です。

今回は少し長めになりそうなので二つに分けました。

それではどうぞ

Ep-04 魔女とIS Apart

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です！！これより貴官らを援護します！！」

目の前の少女が高らかに叫ぶ

「……ウィッチ魔女」

私はその光景を見て、知らず知らずのうちにそう呟いていた。

ウィッチ魔女……

遙か昔よりこの世界に存在する魔法という不思議な力を持った者たち。

しかし魔法といってもいきなりどっかに瞬間移動とか、怪しい術で悪魔を召喚したりとかは出来ない。

出来ることといえば、少し障壁を張ったり、遠くにある物を少し動かしたりする程度であり役には立たない。

そんな役に立つかどうかの力を持つもの……魔女

しかし、彼女たちのその力はネウロイに対しては絶大な驚異であり、ことネウロイ戦に対しては人類の切り札ともいえる存在である。

そんな存在が今日の前にいる。

「この部隊の指揮官の方は誰ですか？」

「は、はい！ IS学園欧州派遣部隊隊長、山田真耶です。」

突然声をかけられ、声を裏返して返事をしてしまった。

声をかけてきた向こうの隊長を見る。

向こうの隊長のその若さに驚く。

「あ、あなたが隊長ですか？」

「はい、そうですが？」

年は14、5といったところである。

そんなまだ年端もいかない少女が部隊を指揮してこの戦場にいるということに驚かない人間はいないだろう

「扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です。ネウロイは我々が相手を行いますので輸送機の護衛をお願いします。」

「え！でも、そちらの人数は3人だけのようですが。それならば我々も一緒に……」

「そちらの隊員は見たところによるとPTSDを起こしています。戦闘続行するのは不可能です。」

そう言っつて生徒たちのほうを見る竹井少尉。

そこには金切り声ですすりなき、金縛りで動けなくなった生徒たち、無表情になり何かを呟き続ける生徒の姿があった。

「あなたたちは今はここを一刻も早く離れるべきです。このままでは生徒は持ちません」

「!?!」

「ここは我々だけで十分ですので早く退避を」

そう言っつて仲間の元へ戻っつていく

「……………先生、ここは彼女たちの言っつ通り輸送機の護衛に回るべきです」

いつの間にかそばに来ていた更識さんにそう提案される

確かにその通りだ。

このままでは生徒がみんなつぶれてしまう。

部隊を預かつたものとして隊員のことを考えるともう限界だ。

此処は彼女の言葉に甘えるべきだ

「…そうですね、みなさん！私たちは輸送機の護衛に専念します！
万一敵が来た場合は慌てず騒がず私に報告！！私が相手をします！
！・・・動ける人は動けない人のフォローに回ってください！！」
私は生徒たちに指示をだし、離れてしまった輸送機に向かった。

「ふう、ようやく往ったわね」

離れていくISの部隊を確認した醇子はほっと一息をつく。

もしかしたら隊長もPTSDになっていないかと思ったがどうやら
正常な判断はできるようだ。

そこへネウロイが攻撃を仕掛けてくるが・・・

「・・・甘いわ！！」

その攻撃を軽やかに躲し、手にもつ九九式二号二型改13mm機関
銃でネウロイを落とす。

「まずは一機・・・！！ 美緒、後ろ！！」

そう醇子が叫び視線を上空に向ける

美緒と呼ばれた少女の後ろに敵が張り付いていた。

少女を落とそうと機銃を放とうとするが、突如ネウロイの正面から少女の姿が消える。

「はあああつー!!」

ネウロイの上空から少女が、その手に握った扶桑刀がきらめく。

両足を複雑に動かし、後回転の要領で一瞬で宙返りをして相手の上を取ったのだ

「貰った!!」

上空から急降下し、そのままネウロイを一閃、敵を両断する。

「これで二機!!」

「後は……義子!! 二時方向の敵をお願い」

「ん、了解」

竹井の指示に気のない返事で返す少女。

地表に背を向けた状態から一気に降下する

降下した少女の先には敵が4機。

そこに向かって恐れることなく一直線に落ちていく

敵に突っ込みながらすれ違い様に次々とネウロイに銃弾を叩き込む

「終わり〜」

少女が通過した後、次々とネウロイは光の破片に変わった。

「ふう……終わったか」

「ええ、二人とも周囲を警戒して」

すべての敵を倒した三人はそのまま上空を周回して残敵がないか警戒する。

「しかし……彼女たちが例の部隊か」

上空を警戒していた坂本美緒飛曹長は心底つまらなそうに呟く

「ええ、IS学園選りすぐりの精鋭部隊っていう噂だったけど……」

「てんで駄目じゃん」

「しかし、なんでまたあんな訓練兵ばかりの部隊を送り込んだんだ？」

「少しでも実績がほしいんでしょう？向こうは怪異が発生してからその開発費に見合う戦果を残せていないみたいだしね」

「それで訓練生の部隊まで送ってくるか？」

「ただでさえ機体の数が少なくて前線に回せる機体がない以上、少しでも使えるなら送って実績を上げたいのよ。なんだかんだで今一番ISを保有しているのはIS学園のようだし。一応代表候補生は軍で一通りの訓練は受けているみたいだけど……」

坂本と竹井は遠くで輸送機の護衛に当たっているIS部隊に目を向ける。

初の実戦を経験したということもあり緊張が抜けていないのか、IS学園の生徒の飛ぶその姿はフラフラしておりかなり危なっかしい。

「あれでか？…… あれだったらまだ戦闘機のほうが全然役立つぞ？」

「軍にもメンツというものがあるのよ、国民の血税で賄っている軍事費の大部分を開発費に使ってるのよ？それなのにいざって時に全く役に立ちませんでした、なんて口が裂けても言えないわよ」

「確かにそうかもしれないが……」

「だからって訓練生を送ってくる上層部の考えなんて私には理解できないけど」

「あんなものにお金をかけているんだつたら、こつちに補修部品の一つでも送ってほしいものだ。現場は倉庫で埃を被っていた旧式の戦闘機や戦車を引つ張り出して使っているんだぞ。」

ISが軍事転用され防衛の要となった後、軍事予算の多くはISの開発費に回され、既存の兵器である戦闘機や戦車の新型機開発計画は凍結、または縮小を余儀なくされた。その為、現在欧州戦線では10年から20年前の旧世代の戦車や戦闘機を使っている。更に補修部品の生産ラインも縮小してしまった為、補修部品がまったくと言っていいほど足りない。今や前線では足りない部分をどうしようかと整備兵が日々頭を悩ませているというのが現状である。

「だけどさすが醇子だね。」

「ああ、よく輸送機がここのルート通るとわかったな」

「ええ、まさか本当にこのルートを通るなんて思わなかったわ。」

元々、今回の任務は彼女たちの部隊が行うはずだった。しかし、任務に入る直前、他の部隊が行うとされ中止を言い渡されたのだった。

何か嫌な予感がした竹井は自身の部下であり、親友でもある坂本美緒飛曹長、西沢義子飛曹長と共に哨戒任務の名目で普段は飛行しない空域に向かった。そして輸送機は竹井が予想した通りの航路を取っていた。

「なににせよ、輸送機が無事でよかったわ。」

「はっはっは！そうだな！」

「じゃあ、さっさと帰ろうよ。私お腹がすいた〜」

「駄目よ、少なくとも安全圏まではついていないと。輸送機をこのままにしては置けないわ」

今、竹井たちが飛んでいる空域は人類側の勢力圏ではあるがしばしばネウロとの交戦が行われる空域に近いため、安心はできる空域ではない。

「うえ〜、めんどいな、もう。」

げんなりする義子

「そういわないの。……………さてと、二人とも弾薬の方はまだ残ってる？」

「ああ」

「問題なし」

「よろしい、……輸送機部隊、これより我々も護衛へつきます。よろしいですか？」

『ああ、頼む。』

「山田さん、よろしいですね?」

IS部隊の方にも確認を取る

『は、はい!お願いしま……!! 竹井少尉!』

「どうしました!？」

突如、インカムの向こうから真耶の悲鳴が聞こえてきた。

『よ、4時方向に大きな機影!……お、大きい』

「なんですって!？」

竹井はその方向に目を向ける

そこには

巨大な黒き影が竹井たちをあざ笑うかのように悠然とこちらに向かって飛行していた。

Ep-04 魔女とIS

Apartment

(後書き)

リバウの三羽鳥、登場!!

Bpartへ続きます

「竹井少尉、新しい敵が！」

「こちらでも見えています。・・・山田先生。そちらで戦えるのはどれくらいいますか？」

「私を含めて4人です」

「そうですか・・・」

竹井は顎に手を当て思案する。

真耶はああ言っているが実際の所は数に入れていいかどうかはかなり怪しい。

IS学園の生徒たちは客観てきに見ても、もう戦うのは限界だろうしかし、あの大型を相手にするにはウィッチ三人ではまず無理だ。

大型単体であれば時間がかかるが何とか倒せるだろう。

しかし大型の周りには小型機が数機、護衛についている。

しかも、今回は避難民を乗せた輸送機もいる。

まだ交戦距離には入っていないものの、足の遅い輸送機をつれて逃げるといふ選択肢もとれない

「……山田さんたちに輸送機を守ってもらったか？」

「いや今の彼女たちでは心もとない。」

「竹井が思案していると」

「山田先生！！ た、大変です！」

「突然生徒の一人が声を荒げる」

「ど、どうしました！！！」

「8時方向に機影を確認しました！！その数……10！！！」

「ま、まさか……敵の増援！？」

「その報告を聞いた真耶の顔がみるみる青ざめていく」

「一直線にこちらに向かって来ます！」

「オールウェポンズフリー全機全兵装使用自由！！ 我々で迎撃します！！！」

「半ば悲鳴のように指示を出す真耶。」

「待ちなさい！！！」

「迎撃体勢に入るIS学園を制す竹井」

「美緒、？ 視える？？」

「ああ、問題ない」

竹井の問いに簡潔に答える坂本。

そう言って、右目の眼帯を外した。

眼帯に隠されていた右目の魔眼が赤く光る。

「日月旗を抱く白い龍のマーク……優刀だ」

「ということは義勇統合戦闘飛行隊ね」

「それって、あの義勇統合戦闘飛行隊ですか!？」

その名を聞いて驚く真耶。

そこへ……

「竹井、済まない遅くなった」

編隊を離れ一人の少年が竹井たちの所まで飛んできた。

「お久しぶりです、緋村大尉。」

「はっはっは！久しぶりだな、優刀」

「美緒も元気そうだな」

「やつほくホムラ大尉」

「・・・西沢、ホムラじゃない、緋村だ」

おおよそ軍隊のあいさつとは思えぬフランクさであいさつを交わす
4人。

そんな中、IS学園の生徒たちの方から小さなつぶやきが聞こえて
きた

「え・・・男？」

「なんで男がいるのよ」

「男のくせに」

「本当に増援なの？」

そのつぶやきを聞いた坂本は生徒達を睨み付ける

何かを言おうと振り向こうとするが・・・

肩を掴まれることで止められた。

「優刀・・・」

「いちいち相手にするな、毎度のことだ。」

そう言ってため息をつく優刀。

「しかし……」

「いいさ、それが彼女達の？常識？なんだろう？」

「……わかった」

「……山田先生、生徒たちを連れて向こうへ行ってもらえますか」

「え、でも……」

「我々であの大型をどうするか話し合いますので周辺にこれ以上敵の増援がないか見張っていてください。」

「わ、分かりました……」

何かを言おうとする真耶だったが、自身を見る竹井の冷たい目に何も言えず、従うしかなかった。

「・・・すみません、緋村大尉。いやな思いをさせてしまいました」

「いいさ、それよりも今はあの大型だ。」

そう言っつて大型のいる方向に視線を向ける優刀

「ああ、でどうする？我々全員で当たるか？」

「いや、全員で当たるには後ろが心配だ。ここはうちの隊だけで当たる。竹井たちは最終防衛ラインについてくれ。撃ち漏らすと、後ろの警戒を頼む。」

「了解です」

「やれやれ、味方を警戒しなくてはならんとはな」

「最悪、あいつらがパニックになったら撃ち落としたって構わない。連中には絶対防御があるからな、たぶん死にはしないだろ。」

「本気か？」

「ああ、撃ち落としてもここは人類の勢力圏内だ。陸戦型にやられることはない。上層部もコアが無事なら文句は言わないだろうし。なにより一番怖いのは奴らがトチ狂って輸送機を危険にさらすことだ。指揮官のあの様子じゃとてもじゃないけど何か起きたときに部下を抑えられんだろう」

「そうですね」

「奴らは一応学生だぞ？いいの？」

「ISなんて代物を使っている時点で学生だからなんて言い分通用しない。ISが国の防衛力であることを知っていて自らが使うことを選んだんだ。その選択をした時点で人を護る側の人間であって、護られる側の人間じゃない。それが嫌ならISそんなんもんを使うべきじゃない」

「うへへ、いくら死にはしないからって人に銃を向けるのは嫌だな」

「誰だつて嫌に決まっている。けど俺たちは軍人だ。民間人を護るのが仕事だ。相手がなんであれ、民間人を危険にさらすのであれば倒す。それだけだ。」

「そうだな……我々も覚悟をしなければいけないか」

「すまないな……ここで起きたことのすべての責任は俺がとる。」

「いいさ、気にするな。あんな連中のために誰がお前に責任を取らせるか」

「美緒の言うとおりです。大尉に責任なんて取らせません、後ろは私たちに任せてください。」

「そういうことだよ氷室大尉」

「ありがとう、三人とも……あと西沢、俺は氷室じゃない、緋村だ」

「わははははっ」

「じゃあ、ここは頼んだ。竹井」

「御武運を!!!」

互いに敬礼を交わし、優刀は先行していた編隊に戻っていった。

「下原、敵の正確な数は？」

俺は編隊に戻ると下原から敵の詳細を報告してもらおう

「はい、高度9000、距離11000に小型機が15機、先行してこちらに向かってきています。その後方に大型が一機接近してきています」

「そうか・・・」

下原の報告を聞き俺は作戦を考える。

「よし、部隊を二つに分ける。まず、俺とジェンタイル隊で敵小型編隊に突入、牽制。大型への道を作る。一呼吸おいて加藤は残りの隊員を率いて大型の相手を頼む。」

「了解」「」

「.....」

隊員から返答が返ってくるが大将 ジェンタイル は返答を返さず一人、ある一点をじっと睨んでいる

「大将、どうした？」

「.....いや、なんでもない。すまなかった。了解だ」

俺の言葉に返答を返すも、ジェンタイルはまだ心ここに非ずといった風だ。

「なんでもないことあるか。そんないかにも悩んでいますって顔してる奴と一緒に敵陣の中に入ったでいけるか。」

「……済まない」

「で……どうした」

「……胸糞悪くしてしょうがないんだ。」

一拍おき、ジエンタイルは口を開く。

「何が？」

「あいつらだ」

そう言っている方向に視線を向ける

「さっきのあいつらの物言いが気に食わなくてな」

「……ああ、そういうことか」

先ほどのES学園の生徒の俺に向かっての陰口をどうやら偶然聞い

てしまったらしい。

「・・・あいつら、ボスに向かつて？男のくせに？なんてふざけたこと言っただぞ。ISを使えるからっていい気になって、普段はえぱり腐っているくせにいざ戦闘になつたら何の役にも立ちはしない、そんな奴らがずっと前線で戦い続けたボスに？男のくせに？だと？一体あいつらは何様のつもりなんだ」

普段の彼女の姿からは想像できないほどの怒りを表すジェンタイル。隣を飛んでいたフェデリカがかなり驚いた顔をしている

それはそうだ。彼女がこんなに怒っているところを隊員の誰も今まで見たことない

「ボスたち、男の人達だつて皆、今もこの戦場で必死に戦っているんだ。家族を、国を、護ろうと、必死で戦っているんだ。そこに男も女も関係ない。私たちと共に戦っている？戦友？だ。その？戦友？をあいつらは貶したんだぞ？そんなの許せるか！」

「大将・・・」

「世界最強の兵器であるISを使えるのは女しかない。だから女は偉い？だから男は私たちに跪け？はっ、恐れ入るよ。だったら今すぐこの世界を救ってみる、世界が救えないなら多くの命を救ってみる。それすらも出来ないで、敵を前にびくびく震えてビビッていた奴が前線で命を懸けて戦ってる仲間に向かつてエラそうな口叩きな！！」

「大将・・・もういいよ」

「ボス、いいわけないだろ。あいつらはコケにしたんだぞ！！私たちの仲間を！！」

「大将、いいんだ。？俺たち？は大将達がそう思っていてくれるだけで・・・それだけで十分だ」

そう、？俺達？は彼女達がそう思ってくれているだけで十分だ。

彼女の言いたいことも痛いほどよくわかる。

ISが登場してから世界は変わった。世界最強の兵器、ISはなぜか女性にしか反応しなかった。その為、女と男の社会的パワーバランスは崩れ、この世界は女尊男卑の世の中になり、男は女よりも弱い生き物と言われるようになった。

ISによる女尊男卑の世界になったことで被害を一番受けたのは間違いなく軍に籍を置く者たちだろう。

特に空軍、戦闘機パイロットたちはその一番の被害者といえる。

役割の大部分はISに取って代わられ、その規模の縮小を余儀なくされた。

それでも今も大部分の軍人は男である

もちろん男にはISを扱う事は出来ないし、俺のように魔法力を持

つ男子は本当に稀にしかない。

でも俺は今の欧州がこうやって何とか持ちこたえているのは特別な力も持っていない彼らのおかげだと思っている

きつと戦っているのがウィッチャやISだけであつたらとつくに世界はネウロイの手に落ちていただろう。

皆が力を合わせているから今もこうして戦ってられる。

そんな共に戦っている俺たちの仲間を、IS学園の生徒は貶したのだ

俺だつてそんなの許せるはずがない……………だが。

「しょうがないさ…………彼女たちはまだ本当の？戦場？を知らないんだ」

そう、彼女たちは知らない

戦場というものがいったいどれだけ過酷で悲惨なのかを…………

絶えず響く銃声

人々の泣き叫ぶ声

人の焼ける匂い

町が燃えていく様

真っ赤に燃える空

そこに浮かぶ黒き影・・・・・・・・

それらの前では男も女も関係ない

皆、等しく命を奪われる

それが戦場・・・・・・・・

そんな光景を彼女たちは知らない。

だが、俺は知らない方がいいと思っっている

そんな経験はもう二度と起きない方がいいに決まっっている。

「俺は彼女たちがそれを知らないことは仕方がないと思っっている。」

「だから、俺たちは彼女たちの言うことなんて気にしない、ただ俺たち軍人はやることをやるだけだ。・・・けど、もしそれを知ってしまっても尚、同じことを言うようであつたら・・・は許さない」

「ボス・・・」

「だから・・・大将が、少なくともウィッチの皆が俺達、男のことを共に戦う？戦友？と思ってくれているのなら、それだけで十分だ。」

そう言っつて大将に向かって笑いかける。

「ふ、・・・当たり前だ。ボスは私たちの隊長だ。誰もが認める私たちの最高の隊長だよ」

そういつてふつと笑みを見せるジェンマイル。

「やっぱり大将はそうじゃないと。そうやって笑っつている方がしか

め面よりずっと似合う。やっぱり美人は笑っていないとな」

その言葉にきよとんとする大将。

周りに微妙な空気が流れる

あれ？

もしかしてまた何か俺やつちゃったか？

100

「ぷッ、ふふふふふ、あはははっ！！ さすが優刀！ 言うことが
ちがうな！このジゴロめ！」

「ちょ、痛っ！何すんだよラル！」

いつの間にか真横に来ていたラルが人の肩をバシッと強くたたいて
軽快に笑う。

「誰がジゴロだ！誰が！」

「まったく自覚がないのか？ だったら余計達悪いな天然ジゴロ！」

「天然ジゴロ!？」

「まったくもう……これだから扶桑の人間は」

ロスマンが呆れたように頭を振る

「大将が羨ましいわ。私にも誰か言ってくれないかしら」

頬に手をやり、はあ、とわざとらしいため息をつくフェデリカ

その肩をちよんちよんとつつく影、

「あら何、伯爵？」

「フェデリカ Quanto sei bello! Non t
i faccio dormire per tutta l'an
otte………《君はなんて素敵なんだ！ 今夜は
寝かさないよ………》

「おそらく、クルピンスキーは口説き文句であろうセリフをロマーニ
ヤ語でフェデリカに囁く。

「あら伯爵ロマーニヤ語上手ね」

フェデリカはそれを軽くいなす

「残念、行けると思っただけどね」

そういうクルピンスキーの顔は大して残念そうではなかった。

「伯爵には悪いけど、私ノーマルなのよ。というわけで……
優刀！今の伯爵の言葉を言ってくれないかしら!？」

「フェデリカ、何言ってるの!？」

「ねえロスマン先生、伯爵はなんて言ったの？」

ロマーニヤ語が解らなかったハルトマンはロスマンにその意味を聞く

「フラウはまだわからなくていいのよ」

ロスマンは笑顔でそう答えるが額に青筋が浮かんでいる。

あ、すげー怒ってるな。

「はいはい、もうその辺にきなさい。敵とあと少しで接敵するわよ」
ちょうどいいタイミングで武子が締めてくれた。

「了解だ」

そう言って話は終わりとはかりに前を向く。

まったく、クルピンスキーとドツリオに感謝しなくちゃな。

「よし皆、準備はいいな!! これより戦闘を開始する!! 我々と出会ったことを奴らに後悔させてやれ!!」

「了解！！！！」

その言葉を聞くよりも早く俺とマルセイユ、ジエンタイル、ドツリ
才の四人は敵群に向けて最大戦闘速度で呐喊する。

突出した俺たちを先頭の小型ネウロイは当然狙い撃つがその攻撃を
体を少しひねることで紙一重で躲す。そのまま敵に向かって両手に
持つMG34の銃弾を打ち込む。

まず一機

その両隣にいた敵を左はジエンタイルが、右をマルセイユが撃ち落
とす

そのまま敵編隊を真っ二つ割る様に突撃、抜けたところで左右にブ
レイク。二つに分かれた敵編隊の背後をそれぞれ強襲する。

「今よ！」

武子達が絶妙なタイミングでその隙間を次々と駆け抜けていく

そしてその勢いを殺さずに大型のネウロイに向かっていった

これで大型は大丈夫だ。

しかし敵もそう簡単に武子たちを行かせようとしない。

敵の一機が急旋回し、武子たちの後を追おうとする

「そうはさせない!!」

追おうとする敵を撃ち抜く

今度は敵の一機がこちらに向けて銃弾を放つ

その攻撃を障壁で防ぎ、編隊の周りを大きく迂回するように旋回しながら攻撃を放った敵を撃ち落とす。

そのまま編隊の側面に向かって突撃、向かってくる一機を銃で牽制、その横を通り抜ける

そこへ・・・

「マルセイユっ!!」

「はあっ!!」

マルセイユが上空から攻撃を仕掛ける。

そのままなすすべもなく撃ち落とされる敵

そのまま低空へと抜けていくマルセイユ。

敵の一機がマルセイユを脅威と感じたのか、そのあとを追いかける。降下速度も加わって敵はどんどんマルセイユに勢いよく近づく。

ついに射程にとらえようとしたとき、

「甘い!!!」

マルセイユはロールしながら機首を上げ、弧を描く螺旋を描がきながら飛行する特異な機動を取る。

マルセイユがその機動を取ったことにより、勢いがつき過ぎていた敵はそのままマルセイユを追い抜いてしまった。

「もらったっ!!!」

敵の背後を取ったマルセイユはその隙を逃さず敵に機銃を叩き込む

「これで三機目!」

残りは小型は9機。

、右の編隊に向けて攻撃を仕掛けるジエンマイルとドツリオ。

二人は敵編隊に反撃の隙を与えまいと勢いよく呐喊する。

ジエンマイルは自身の前方にいる敵の攻撃を気にしないといった風にそのまま敵に突っ込み続ける。

そのまま至近距離まで近づき……

「くらえ！」

右手に持つショットガン、レミントンM870を敵の機首ギリギリのところまで発砲。

敵は粉々に碎け散る

「ふむ、威力は問題なし」

銃を一回転させて排莖、次弾装填。

そのまま、次の自分に向かってくる敵に撃ち込む。

次の敵も粉々に砕け散る。

「ち、連射性と射程、速度が問題か・・・やはり航空機動戦にはあまり向かないな」

そういうとレミントンM870を肩にかけ、背負っていたM249を左手に、ホルスターからデザートイーグルを抜き右手に持つ

次々と敵機がジェンタイルに向かって攻撃を仕掛ける

「今の私のは最高に機嫌が悪いんだ、落とされたくないやつは近づくな・・・」

「大将怖すぎるわよ。・・・まあ気持ちは分からなくないけどね」
ジェンタイルの斜め後方についていたドゥリオは自身に向かってくる敵をM151で撃墜しながらつぶやく

「さてと・・・彼女たちに教えてあげようじゃない。自分達が思っているほどあなたたちはすぐくないって事を」

ドツリオは一体の敵に目をつけると一気に加速し突撃する。

敵は撃ち落とさんと機銃を放つがドツリオはなんてことないようにその攻撃を体の重心を移動させることで攻撃をかわす。

そのままの勢いで狙いを定め、銃弾を叩き込む。

「まずは一機目！」

上昇、そして次の標的に狙いを定めて急降下、敵にぶつかりそうになるほど近づくまで銃弾を叩き込む。

「これで二機、次！」

次の標的に向かおうとするが、

「・・・上!?!」

上空から敵機が一機、ドツリオに強襲する

その攻撃をシールドで防ぐ

「いい攻撃ね・・・けど!」

ドツリオは手に意識を集中させる。次の瞬間、彼女の手には光が集まり、その手に剣の形を成していく。

109

「それじゃ私は落とせないわよ!!」

その手に現れた剣で迫るネウロイを両断する。

「あと、一機!」

最後の一機の方へ向いた瞬間、

「残念、終わりだ」

最後のネウロイはジェンタイルの手によって葬られた。

「あら、とられちゃったわね。 どう？ すつきりした？」

「ああ、気分爽快だ。」

そう言って口の端をわずかに吊り上げるジェンタイル。

「そう」

そう言うのにこやかに笑いかけるドッリオ。

「さて・・・あっちも終わった様だな」

ジエンマイルが視線を向ける。

その視線の先いた優刀達は。たった今最後の小型機を撃ち落とし、武子たちの所に向かおうとしていた。

「さて・・・私たちも行きましようか」

「今更私たちが行っても間に合わない気がするけどな」

「ラル隊はそのまま攻撃を続行、コアをあぶりだして！ ロスマン隊は砲座に攻撃を集中、ラル隊を援護！ 定子ちゃん、私たちは敵右翼を叩くわよ！」

「はい！」

敵大型ネウロイに対して勢いよく降下する武子と下原。

二人が狙うのは、敵ネウロイの両翼、その付け根の部分

付け根に向かって二人は急降下し機銃を放ち翼を根元から吹き飛ばす。

「このまま左翼も……!!」

そのままネウロイの上に上昇。再度左翼に向かって降下する。

「はあっ!!」

続いて左翼を破壊

しかしネウロイはすぐ再生し、元の姿を取り戻す

ネウロイは再生が完了すると武子に向かってビームを放つ

112

「やはりコアを破壊しないと駄目ね」

「武子!! コアを発見した! 胴体のちょうど真ん中だ!!……
くそ、もう再生しているのか!」

ラルからコア発見の報を聞き、武子はすぐに指示を出す。

「了解、エディータ! 胴体上部、前方左側の銃座をお願い!」

「了解！」

「ラルは右側の銃座を！」

武子の指示にを聞いたエディータとラルは次々と銃座を破壊していく。

「これで対空砲は破壊した。再生するまでコア周辺は丸裸……やるなら今ね ドラツへ02より各機……これより敵コアを破壊する。援護されたし！」

「了解！！！」

武子は下原をつれて急降下を開始する。

降下中も加速し、大型との距離を縮める

目の前には視界を覆うほどの巨大なネウロイ。

その大きさに圧倒されそうになるが、ただひたすらに距離を詰める

「……今！」

引き金を絞る。

機銃から放たれた銃弾はネウロイの装甲を深く抉り、コアを露出させた。

「定子ちゃん！」

「はい！」

後方を飛ぶ下原の銃撃

下原の放った銃弾は吸い込まれるようにコアへ

次の瞬間、

バーーンッ！！

ガラスが割れるような音があたりに響き、赤いネウロイのコアは碎け散る

コアが破壊されたことにより、ネウロイはその巨体を光の破片へと変えていった。

「山田先生！！敵大型ネウロイの破壊を確認しました！」

生徒の一人からそう報告される。

報告してきた生徒の声は喜びに満ち溢れていて、今にも泣きだしそうである。

「やったー！！」

「わ、私たち生きてる……」

周りにいる生徒たちも歓喜に沸いていた。

そんな中、ただ一人だけ表情を暗くしている人物が一人

「更識さん、どうかしました？」

「……いえ、なんでもありません。みんな無事でよかったです。」

「そうですね、落とされた子も無事のようにですし、本当に良かったです」
「ええ、そうですね」

真耶の言葉に笑顔で答える楯無ではあったがその胸のうちは暗澹あんたんとした思いだった

(……結局、今回の私たちの戦果は旧型の小型機が6機。しかも彼女たちが来なければ輸送機も守れずあのまま私たちはやられていた。敵もすべて撃墜できず、輸送機も満足に護れなかった……世界最強の兵器が聞いてあきれられるわね)

今回の戦果は旧型の小型機が6機。しかもこちらの損害はISが1機である。

幸いコアは無事だったものの、IS一機に見あう戦果じゃなかった。

(いえ、私たちが未熟だった……ということ。この結果に？上

？はなんて言うかしら？ 怒ってまたとんでもない無茶なことをや
るぞとするわね）

己の未熟さを痛感する楯無

そしてある一つの決意をする

その瞳はある一点を見つめる

一点を見据える彼女の瞳には強い決意の光が灯っていた

Ep-04 魔女とIS B part (後書き)

Ep-04 終了です。

ごめんなさい、めっちゃ長くなりました。

なんか、IS学園の生徒たちが嫌な子達に見えちゃいましたね。

でも、あの反応がISでは一般的なんじゃないですかね。

個人的には大将の言いたいことが伝わっていねばと、そう思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4483x/>

INFINITE WITCHES ー無限の蒼穹を駆ける白き龍ー

2011年10月25日02時00分発行